メキシコ湾原油流出事故の影響（2）

計量分析ユニット
森田裕二

要旨

米国南部ルイジアナ州沖のメキシコ湾で発生した原油流出事故に伴う油汚染の被害は拡大を続けている。BP は作動不能に陥った BOP（噴出防止装置）の上部に油・ガスの回収装置を設置するなどの対策により、日量 25,220 バレル（6 月 29 日）程度の原油を回収しているが、油井からの流出量は 35,000-60,000B/D と見られており、回収が追いついていないのが実情である。

一方、事故原因の究明に関しては 6 月 17 日に BP に対する米国下院の公聴会が行われた。議員からは、BP は掘削作業を急ぐあまり安全の確認を怠ったのではないかとの指摘があったが、BP は調査を継続中であるとして言明を避けた。また、オバマ大統領による 5 月 30 日から 6 ヶ月間の深海油田掘削禁止措置に対して、ニューオリンズの連邦地方裁判所が、油・ガス田の掘削に携わる企業への経済的打撃が大きいとして禁止措置を覆す判断を下した。政府は連邦控訴裁判所に判断の差し止めを求めて控訴しており、今後の動向が注目される。

お問合せ：report@tky.ieej.or.jp